

# 華北の山野かけある記

①

清原 清人

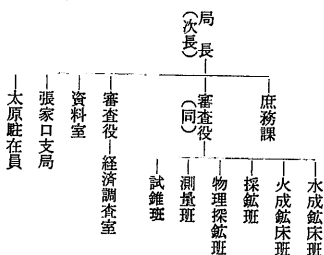
この雑文は私が北支那開発株式会社の調査局員として 華北の各鉱床地帯を歩き回り 特に印象に残った思い出の数々を書き綴ったものであるが 20数年を経過しているので 多少記憶違いもあることと思う。また 当時の華北の情勢 特に産業基盤の育成強化のために あわただしい北京に北支那開発株式会社の誕生をみるに至った状況を記して 文章の不備を補足したい。

昭和12年の秋 瀋溝橋畔におこった1発の銃声は たちまち枯野に野火の広がりにように華北全域に向けて広がっていった。戦線が拡大するに伴い 軍が接收する事業体も多く 其後の管理もあって 接收管理の業務を北京にあったK社に委託した。私は昭和13年1月 K社の囑託として鉱山の接收管理に従事するために渡支した。まる3年のうちに 内地の各鉱山会社(他部門においても同様であったろうと思う)は それぞれの希望と 国家経済的見地からの割り振りて各接收鉱山に進出し開発に努力することになった。

一方北京では これ等の事業体を統轄するために国策会社である北支那開発株式会社なるものが生れ 接收管理業務に専念したK社は発展的に解消して北支那開発会社に吸収された。その北支那開発会社の1部門として調査局が誕生したのが15年末頃で その経費は全額国庫補助で 本社各部門とは別会計であった。私は16年の1月に調査局の職員を拝命したのであるが 当時は 地下資源関係の調査員も経済調査員

も少人数で 第1調査室 第2調査室とわかれていただけで 細かな職制はなかった。其後3月頃から4月にかけて 満鉄調査部から 多数の地質 採鉱 試錐 測量等の地下資源調査員が転入し また他の会社や新卒生の採用などがあって 急に人員が充実したので第一次の機構改革があつて調査局は下図のように改められた

(組織表)



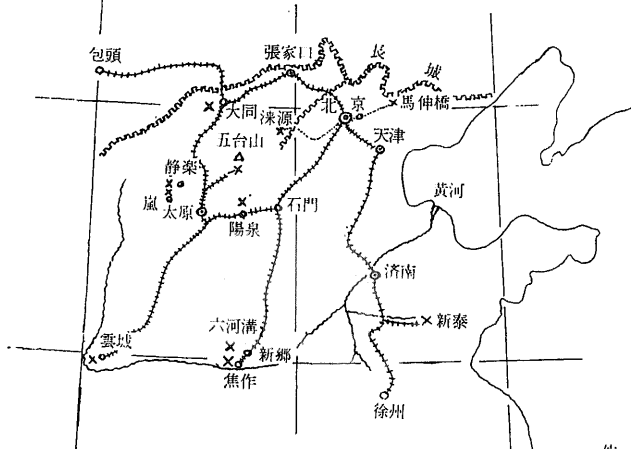
支局並びに太原駐在員は それぞれ現地の大使館や軍との連絡や接渉にあたり 直接調査業務には携わらなかった。私は水成鉱床班に属し 炭田調査や 露天化残留鉱床等の調査に従事したが 火成鉱床とも水成鉱床とも判然としない鉱床などにも派遣された。

当時の地質係員で 現在も地質関係で活躍の諸氏に 森田日子次(日鉄) 塚野善蔵(福井大教授) 小貫義男(東北大教授) 庄司誠一(試錐会社経営) 志田日功(名古屋大教授) 増淵堅吉(鋼生鉱業取締役) 清島信之(地質調査所) 山崎達雄(九大助教授) 東郷文雄(燃料公社)等がご健在である。

1. 五台山赤白珪石鉱床の思い出  
昭和16年の春なお浅い某日 私は軍が接收した天津の北洋(?)大学の書庫の中で AさんTさんと共に図書の整理をしていた 会社の地下資源関係や経済調査に必要な文献があれば抜き出すようにとの軍の好意によるものである。薄暗くて寒々とした部屋で Aさんの講義? を聞きながら12冊の本を選び出した時である。会社からの電話で 私にすぐ会社に帰れとのこと 急いで北京に帰りY審査役の前に立った。Yさんは優しい眼差しで私を見ながら“五台山の下の赤白珪石調査に行かないか? 資料整理よりよいだろう?”と言われた。私としては もちろん暗い書庫の中で老人のAさんと資料の整理をするより 野外調査の方がずっと良いに決まっているが 赤白珪石などというものの鉱床は文献で読んだことさえない代物だけに 返答をためらわずにはいられなかった。私の当惑した気持ちを察して下さったのか Yさんは“K君も同行させよう 君とK君は旧知の間柄だったね 2人で相談しあってやって来たまえ”と言ってくれた。私は親切な上司の命令を直ちに受けた。測量は つい先日陸軍中尉の軍服を着て着任して調査室の連中をビックリさせたH君に決った

五台山というのは 山西省東北部の支那では有数の霊山で 地質上にも五台系などの名称で知られた有名な山であるが 治安の悪いことも当時は有名であった。土地も高く奥地であるので寒気を予想して会社の用度係で皮のジャンパーを借用して着て行くことにした。治安の悪さに対する不安もさることながら 大陸に渡って3年にもなるが 其間 軍の鉱床接收業務にたずさわっていたので この調査が大陸での初めてのことで 新しい土地の地層に対する不安と興味入り混った複雑な気持ちで山西の主都太原に向かった。太原の山西産業本社で現地の様子を聞き 鉱床近くにある同社の定襄鉄々業所へ連絡 1泊して現地に向かう 現地にもっとも近い宿泊できる町は東冶鎮という町で この町は旧山西軍閥の大御所閻錫山氏の生家のある町で それはおどろくほどの豪壮な邸宅であったこの町には日本軍の基地があり 中隊本部があった。

われ等調査班の警備もここでだしてもらうことになった。トラックには軽機も1丁持込まれたが五台山を眼前にした山西の奥で わずか1コ分隊にもたらぬ警備では心細くてしかたがなかった。それに道路は山西省特有の厚い黄土層の崖下を通り見通しはまったくきかない。敵の大軍のただ中に突込んで行くような無謀さが時々脳裏をかすめる。黄土がやや薄くなり 見



位置図

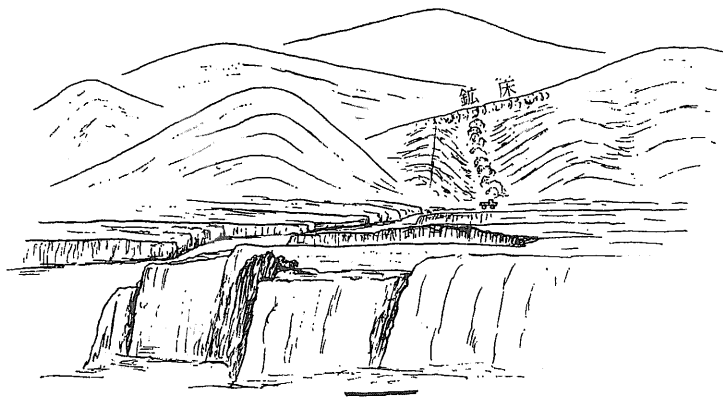
0 100 200 400 km

通しがよくなると眼前に岬々とした山塊が現われてきた。これが五台山々塊の一角である。鉱床は路が山塊に突き当たった所だと案内人がいう。車は露頭の直ぐ下で止まった。H君は早速平板を組立てて測量にとりかかる。測量の範囲の概略を定め兵隊さんには2手に分かれてもらって鉱床両側の屋根に登って調査員が安心して働けるようにした。前方遙かな稜線に敵兵らしきものが2・3人見えるという。敵の歩哨であることは確実に撃つてこなければいけと念じながら仕事にかかる。

トラックの前の小さな谷を埋めて頂度水河のような格好で白と赤の斑状岩塊が長く続いている。これが赤白珪石かノ初めて見る奇異な鉱石 その乳白色と赤褐色の色調の軟かく美麗なこと ちょうどロースの肉を思わせるものがある。私にはもちろん其品質の良し悪しがわかるはずもないがただ物でないことは容易に推察された。聞くところによれば非常に優秀な珪石だとのことである この谷を満たした鉱体? のみに気をうばわれていてふと上方の尾根の露岩を眺めると どうも赤白の斑状構造のようで さては尾根部のものが鉱体の本体であって この谷部のもは尾根の露頭が崩れ落ちてきたものではなからうかとの疑惑が深まってきた。私は最初にこの鉱石を見たとき 古い(震旦紀ぐらいの)礫岩の変質したものではなからうかと思つたのであるが この付近の状態からは地層と直交した状況下にあり尾根の露出状況からは整層状態に見えるのである。いづれにせよ尾根部の露頭を見ねば話にならないと考え K君はと見ればはるか上方の尾根近くをほうようにして登っている。私も後を追った。

尾根は右方が高く 峯に続き左方に低く谷へ伸びている。鉱体はこの尾根の頂部に連続し層状に発達している。そして私共が登ってきた面で数mの崖をつくり その上に登ることは容易でない。この上に登り鉱体の厚さや延長を見極めようか それには迂回しなくてはならぬなどと考えていた其時 数発の銃声が奥の方から聞こえた。今まで数回敵襲を経験したところから判断して 銃声は少なくとも1軒余を離れている。

しかし山から降りたり トラックに乗込んだりするには案外時間もかかるしそれが威嚇射撃であったとしても もう調査などのできる状況でないことは確かなので敵が接近せぬ間に引揚げることにした。ついにこの鉱床が堆積起源の層状鉱床であるか またT字形に露出するところから火成々因のものであるかさえ見極め得ずしてこんな現地の状況で 未完成の調査に終わっ



五台山赤白珪石鉱床

たが襲撃を受けなかっただけでもまだ幸いだったと自分自身をなぐさめて北京に帰つたのである。

先年故人となられた主査のH審査役は厳格な方だった。私はおそるおそる未完成の地質図を先生の前に差し出した。出張の報告である。2・3の質問を受けた後主査は“もう1度行ってきたまえ”と言ひてポイと立って出て行かれた。私は泣くにも泣けぬ思いで引きさがつた。それを脇で聞いておられたY審査役が私の前に立たれた。父親から叱られてベソをかいている子供をなぐさめる母親のように優しい眼差しで言われた“北京大学のT先生に電話しておくから先生から色々教えて戴いて報告書をまとめなさい”と 私は涙がにじみ出るのを止めることができなかつた早速採取してきたサンプルと 他人には見せたくない未完成の地質図を持って大学にT先生をお訪ねした。先生から礫岩ではなからうかというお返事を戴いたのが ほんのチョッピリ私の心を明るくしただけで大陸最初の調査は 落第点の暗い気持でおおわれた。

## 2. 焦作鉄鉱 臥竜城の思い出

これも16年のたしか秋の気候のよい時だったと思う。北京大使館(当時は興亜院とあった)から河南省の焦作鎮附近に大規模な鉄鉱床が発見されると 軍から連絡があったので調査員を派遣してもらいたいとの申し入れがあった。

北支開発調査局の主脳部には 北支の地下資源に対する概略の見当はついていたので あの辺にそんな大規模の鉄鉱床があるう管がないとわかっていたが 軍や大使館に逆らうようなことは許されず“誰か行かざばなるまい”というのがほんとうのところであつたようだ。

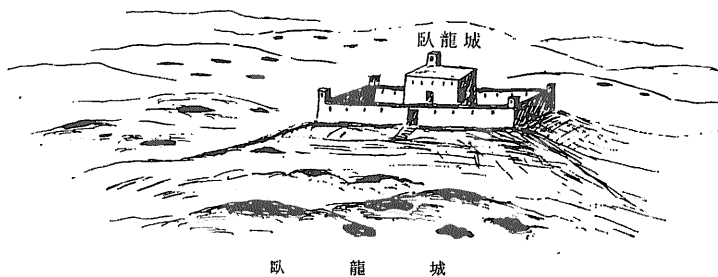
当時はもう局にも満鉄調査部からの大量転入で調査員の陣容も立てなおっており私などが鉄鉱床の調査に狩出されなくとも

多士濟々というのが実情であつたのであるが 主脳部の該鉄床に対する予想は おそらく山西式鉄鉱で 奥陶紀石灰岩上の不整合面にできた残留鉄床であろうということ で Y審査役から私に行くようにと話しがあつた。

世の風評というものには話に尾鱈がついて大きくなりがちなので この話をN社の北京駐在員W氏が聞いて内地のN本社に打電した。N社では“そのような大鉄鉱床を見逃がすことはできない”とばかり調査課長のY氏が若い地質家F君を帯道して飛行機で北京に飛んできた そして私の調査に参加させてもらいたいと申し入れた。当方に文句のあろう筈もなく N社のY氏 F氏 北京駐在員のW氏 それに小生の1行4人で出発することになった。

現地焦作に着くと駅には立派な乗用車が迎えに来ており ちょっと毛色の変つた某参謀本部という門札のかかった一郭に案内された。参謀数名に付き添われた司令官は“左剣竜”という人で 針のような荒い真黒な髭をたくわえた見るからに荒武者という感じの人であつた。彼の語るところによれば 彼は所謂馬賊の頭領であつて手兵1万有余を有し 河南の渡河作戦でわが軍に協力 其功により本鉄鉱床の権利を軍からもらつたとのことであつた。また左剣竜氏は語る。自分はまぎれもなく日本人であるが 先の満州事変で戦死者の列に加えられ 日本国籍を失つた。それでしかたなく満州で馬賊となり推されるままにその首領となり 現在の中国名を名のるに至つたが 本名は佐藤某である意味のことを述べた。その風貌には彼の経歴を物語るものが感じられた。

もともとこの調査はわが社の調査として計画されたものであり N社はそれに便乗したに過ぎないのであるから筋としては私が交渉の矢面に立たねばならぬ運命にあつたが 幸にY氏が年令的にもまた社会的な貫録といったような点でも若輩の私らが出



臥 龍 城

るまくではなく 私はお伴の格で引きさがついていたので 自然Y氏が調査のリーダーとなり私はおおいに助かったような次第である。いよいよ自動車数台を連れて鉱床現場に乗り込むことになった。鉱床は焦作鎮の街の後方台地一帯であるが道路はよく整備されていた。台地の一段高い所に割石を積んでつくった城壁があり頑丈そのもので数十名で守れば数千の敵も容易にこれを落とすことはできないといていた。

城門には肉太な達筆で“臥竜城”と書かれていた。

鉱床はこの臥竜城一帯がそうであり 局の主眼が予想された通り山西式鉄鉱であった。山西式鉄鉱というのは奥陶紀石灰層上部の不整合面や 石炭紀上部の不整合面上等に形成された露天化残留鉄床で 一般に径10~30cm 程度の褐鉄鉱団塊で 山西省の炭田地域に発達がよく山西式という名称が生まれたのであろう。当地域のものは奥陶紀石灰岩層上部にできたものでその上部に在るべき石炭系の地層が完全に剝脱されたか 堆積がなかったのか不整合面上の鉄鉱はばん土質頁岩と共に露出し緩やかな基盤の起伏面上に乗って点在している。このような状況を見れば軍人のみにかぎらず 素人目には地下一帯に大鉄鉱床が広がるのではなかろうかと想像するのは無理からぬことである。

特に当地域の鉄鉱団塊は大型でも厚き数m径10数mに達するので 地に埋もれた状況からは団塊を想像することはちょっとむずかしいところであろう。

この鉄床は本調査の1・2年後にG社により土法製鉄用として開発されることになり 私と採鉄班のK君が開発計画に参加することになり 再び当鉄床を見る機会があったが 試掘坑道によっても鉄体が扁平な団塊であることは確かめられた。(土法製鉄とは 径10cm長さ50cm内外の円筒状のルツボに鉄石を入れて野焼的にルツボ内の鉄石を熔かして鉄をつくる方法で中国で古くから用いられた製鉄法のことである)

調査を済ますと司令部側では町の料亭に宴席をもうけており 辞退のできるような状況ではなかった。千軍万馬の中を撃ち

まくり駆け回った荒武者達がずり居並んで睨みつけられては 如何に私が酒を好むからといても そううまくとは飲めない。特に その後に待つものありと感じられては尚更のことである。急拠内地から飛んで来られたYさんは さぞ後悔された事であろう。私は私が負うべき責任と難儀をだまっで自分で引受けていられるYさんに申し訳ない気持ちでイッパイだった酒宴が済むと ついに心配していたことが現実の問題としてあらわれた。左剣竜氏はYさんの前に座を占めて 大鉄床であるという折紙をつけてくれというのである。このような種類の人に鉄床の実体を説明して理を通して了解してもらうことはきわめて困難なことである。私は少し離れて坐っていたので Yさんとの間にやりとりされた言葉はわからないが 一方は“色よい返事をくれ”の他になく 一方は実体を無視した虚偽の報告書は書けないという平行線を走ってお互いにゆずらなかったようにみえた。Yさんは後に会社の重役になられた程の人であるから供応や威しなどでへなへなど崩れ落ちるような だらしのない方ではなく眼先に鋭い光がみられるように激しい気性の方だった。

北京から京漢線を南下する汽車の中で若いF君に“君達は古本屋などで これは立派な資料だと思うものを見つけた時は明日会社の手続きを済ませて買求めようなどと思わず 自分で立替えてさっさと買って帰れ立派な資料などは明日までそこに在るとは限らないぞ。事務やの言うことなど聞いては仕事にならない。後は俺が始

末してやる”と。信念に生き抜いてこられた氏の強い性格を示す話は他にも承った決が手兵1万有余を率いる馬賊の頭領との対にも少しも動ずる色なく 一步も譲られなかった其日の氏の態度は 私の脳裏に強く焼付けられた。

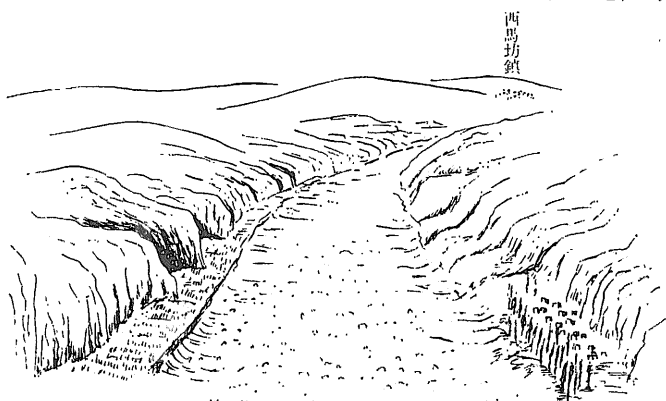
### 3. 山西 静楽県西馬坊鎮の満俺 鉱床と敵襲の思い出

太原の北方 忻県から西へ約100kmの地点に静楽県があり 静楽県からさらに西方20kmのところに西馬坊鎮という村落がある。だいたいの鎮という字は大きな村落日本なら町という字に相当するものであるが 西馬坊鎮の村はずれに満俺鉄床があって 山西産業の鉱業所があった。日産5トン内外の小鉄山である。

昭和17年の初夏の某日 私はY審査役によばれて この鉄床調査に行くよう命を受けた。そして測量の責任者として Ka君を推された。Y審査役は非常に部下を可愛がる方で Ka君は長い間助手として働いて来たが もうそろそろ一本立ちできるだろうから責任をもたせたいとの親心であった。もちろん私に異存のあろう筈もなく Ka君を主任者とし同僚のKo君を助手とし 別格のT老人を加え測量員3名の多人数となった。若い2人はYさんが老人を加えた意図がわからないので老人が加わることを好まなかった様子であった。通訳のR君と私で 1行は5名になったのである。

太原の特務機関で手続きを済ませ 静楽県にある独立大隊本部への糧秣輸送のトラックに便乗するようにとの命を受けた。忻県から静楽県に至る間は治安の悪いところで 糧秣輸送のトラック30台余を連れていくのに なお1小隊の警備専門の兵員を必要とした。

忻県を離れて暫くの間は道路もさ程悪くなかったが 少し奥に入ると道という程の道はなく 応急にトラックを通すように切



敵襲を受けた河床道

西馬坊鎮

開いたところが多かった。 ついに河に着しかかった。 もちろん橋梁などのあろう筈もなく、トラックは1輛また1輛、河の中に入り、水深は膝頭程度のものであるが、河幅は馬鹿広く、20台余の車は河中に並んだ。 夜行軍ではないが現代版“鞭声雨々”といった感じで、今敵襲を受けたらなどと思うと身の引きしまる思いであった。 そんな不吉な思いにふけっているとき、1台の車が河中でスリップをおこし立ち往生をしてしまった。 さてめんどうなことになったと氣をもんだが、たびたびおこる現象でもあるのか、兵隊さん達は少しもあわてない。 それでも相当の時間は費やしたようで、静楽県の部隊本部に着いた時は夕暗がせまっていた。 輸送部隊に別れを告げ、部隊本部の中庭に待機していた満俺鉦山のトラックに乗り換えて西馬坊鎮に向う道路はない。 河床に水がないので河床がすなわち通路である。 はるか前方の丘の上にトーチカが黒く浮び上る。 わが軍の分哨である。 無警備の一行にとっては心強い安心感を与えるものであった。 西馬坊鎮に着いた時は、まったく夜のとばりが降りて真暗であった。 中隊本部の庭でトラックを降りて中隊長や指揮班の連中に挨拶を済ますと、もう10時頃になっていた。 持参の慰問品を差し上げ、軍側の招宴があった。 この中隊本部は部落の裏にある黄土台上にあって、附近を一望のうちにおさめ調査から帰って汗をふきながら眺める景色や気分にはなんとも言いようのない、壮快さをおぼえたものである。 山西産業の満俺鉦山の宿舎は部落内にあったが、犬の子ともつかず鹿の子でもない1頭の動物が飼ってあって、聞けば“ノロ”という動物だそう。 このノロという動物は非常に走ることの得意な動物だそうで、蒙古の平原などで軍のトラックに沿って走り、その前を横ぎつてはひかれたりする馬鹿さもあると、このことで可愛いおとなしい動物である。

満俺鉦床は抗内掘り、日産5トン内外を出していた。 震旦系、風化の著しい砂岩層中に層状に発達している。 鉦床の厚さは40cm内外で、連続はさ程ないと考えられる。 おそらく露天化残留鉦床に属するものと推定した。 各所で探鉦抗道を掘っていたが、黄土層の厚い地域で、地層の連続の追跡に思うにまかせず探鉦は困難な条件下におかれている。 この附近には層状をなす鉄鉦床もあり、1~2mの厚さでよく連続するが、一般に貧鉄で鉄質砂岩に漸移することができなかつた。

2カ月の予定の調査も無事済んで、軍隊の特殊な香のある残飯をパクツイていた時である。 陽はすでに沈み夕暗が静かな山

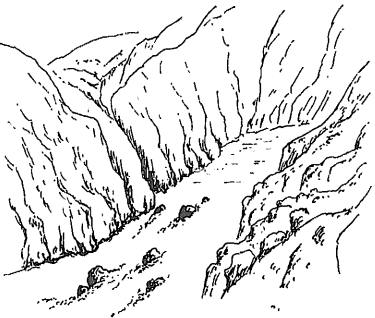
あいの部落を包み、兵隊達は夜の歩哨勤務についた。 突然、静楽の大隊本部から糧秣輸送のトラック隊が到着したとの電話があった。 この輸送隊は明朝早く太原に帰るので、この便を利用するならば今晚のうちに静楽に出る必要がある。 若しこれも見送れば、次の便は1週間ばかり先になるのである。 Ka君は新婚早々の出張のことで、2カ月にもおよぶ山の中の生活にはもう飽き飽きしていたのであろう。 私に出発をせまった。 私とても木石にあらず、しかも30歳才の男盛り、早く引揚げたい気持ちに変わりがある筈もなかつた。 あいにく中隊長は討伐に出かけて留守だった。 留守隊長の若い小隊長に情況判断をもとめると、彼は即座に“大丈夫だ”と答えた。 そして続けた“途中に分哨もあることだし、日本軍10名、自衛隊10名をつけてあげましょう”と。 私は出発を決意し、調査用具や私物を積むために、驢馬11頭を集めるよう通訳のR君に命じた。

驢馬の調達に時間を費やし、出発したのは夜の10時を回っていた。 河床の夜道は礫につまずくなどで歩きにくかつた。 私は万一を考えて、調査結果の資料だけはカバンに入れて手に持った。

体中の神経が針のように鋭く敏感だった。 出発から1時間半か2時間も歩いた時だったろうか、左岸の部落から一斉に銃声がおこった。“しまった”と思って河床に臥した警備の班長は兵長で、私は彼に応戦をうながした。 しかし彼は聞き入れなかつた。 彼の言によると、味方の軍勢が少ない時の夜間戦闘では銃声によって兵員の数を知れるので、撃ってはならぬと云うのである。 私は黙らざるを得なかつた。 またひとしきり撃ち出した“驢馬の積荷をおろせ”と誰かがさげんだ。 私は大きそうな礫を手さぐりで探し頭の前に置いた。

この調査に出発するとき、長男がヨチヨチ歩きで、社宅の門まで送ってきた姿がありありと浮ぶ。 もう再びあの児を見ることも出来ないだろうかと悲しい。 銃声がやんだ“今だ”と思って後方の粟畑までさがる。 粟畑は河原より1m余高く、星明りに白いシャツが夜目にもくっきりと浮び飛び上る度にそれが目立った。 皆はシャツをぬいで捨てた。 2ヵ月間の日光浴で皮膚は淡紙色をしているので、ちょうどよい位の保護色であった。

粟畑に飛び上るのが見えたのであろうか、敵はまた一斉射撃をしてきた。 極度の恐怖感で喉はカラカラにかわくし、尿意が盛んにおこる。 臥せたまま用を足す。 やっと撃ち止んだので更に後退する。 幸に黄土崖にできた雨裂があったのでその中に逃げ込んだ。 Ka君と私と他にも一人い



華北の河にはめずらしい涇源付近の急流

たが、誰であったか、ついに失念してしまつた。 この雨裂にいれば、敵が攻め寄せて来たら逃げ場がないので終わりであるが、銃撃に対しては絶対に安心である。 そのうちには友軍の援軍も来るであろうと、少し落ちついた。 銃声も止んだが、雨裂の中から出ることは危険であり、黙々と夜明けを待つ他はなかつた。 銃撃を受けた河向うの部落から鶏の音が聞こえ、夜が薄明りと共に明けはじめて、やっと雨裂の口からのぞいてみると、三々五々粟畑の中から頭を出している。 言わず語らずのうちに皆は粟畑の中に集まつた。 兵隊達はどうしたのだろうと目で探していると、はるか後方の黄土崖の上に登っていた。 襲撃を受けながら1発の弾も撃たずに逃げ出したふがない兵隊に怒りをおぼえた。

しかし、それ以上に“生き残つた”よこびが強かつた。 兵隊達も丘から下りてきた。 そして班長である兵長は“応戦のために後方台地を確保した”という中隊本部への申訳に口裏を合せてもらいたいと申し出た。 私はあまりの虫のよい兵長の言葉に腹がたつたが、今さら兵隊の責任を追究してみたところで仕方がなく、軍隊の厳しさを思えば彼等が可愛相に思えて、彼の申し出に応じた。 この敵襲事件は、いちはやく太厚の山西軍司令部に報告されていたので、私共は直ちに太原に向つて出発することになった。 そして山西軍司令部の参謀室に出頭した。 当時、調査局の太原駐在員としてK氏がいた。 彼は50才を過ぎた探鉦さんであったが、その態度がきわめて高圧的で、我々若い連中のものつとも苦手とするところで、彼に対して“K大人”のあだ名を擡げて敬遠していたのである。

そのK大人が、私が入つて行つた参謀室で参謀と何やら話していた。 私が近寄ると“清原お前は酔っぱらつてもいいのだから”と大きな声で怒鳴つた。 私は彼のこの種の野性的な言動に今さら驚きはしなかつた。 この次第を弁解すると彼は“酔っぱらつてもいい者が、あの危険な奥地で夜行軍などをどうしてやる”とたたくか

けて来た。思えば彼の言には私の心の奥にひそむ北京への望郷の念に針さすものがあつた。私はKa君に帰りを急がれたと思つているが自分自身が帰りを急いだのではないかと私は黙らざるを得なかつた。幸いに参謀は夜行軍のことにふれず調査結果が水泡に帰したのではないかと心配してたずねただけだつた。私は調査資料を肌身離さず持っていたことに不幸中の幸いを感じた。

司令部の正門を出ると後から小走りで追つて来た大人につかまつた。彼は言う“今は済まなかつた。しかし俺があんなふうと言つたので参謀は君に対して何も言わなかつた君と俺は内輪同志だ悪く思ふな”と。私はムツとしていたので返事もしなかつたが考えてみればK大人の言葉には社会というものの裏のぞかれようでさすがに人生の大半を過ぎてきた五十男のかけひきを感じられて彼の失礼をせめる気持は柔いだ。彼はそれでもまだ済まぬと思つたのであろう“何処かで一杯やろう君等も命拾ひをしたことだし”と言つてとある店に案内した。

私は山西という土地から早く去りたかつたそしてあの事件を早く忘れたかつたそしてぼんやりと無意識のうちに彼について歩いていった。北京に帰る汽車の中で“もうこんな危険な仕事はやめよう”として少なくとも生命の安全だけは保証されている内地に引揚げようと思つた。

会社では皆が心配して待つてくれたが“心配”よりも敵襲への興味の方が強かつたようだ。私はY審査役に会社を辞めて内地に帰りたい旨をのべた。Yさんは“そう思いつめんでもよいではないかしばらく何もせずボンヤリして過し給えそのうちにはまた山に出かけたくなるよ”とやさしくいたわつて下さつた。

この時もまた私はYさんに“母親”を感じたそして甘えるように数週間を腑のぬけた人間のように何もせず過した今にして思えばこの事件も夏の夜の短い悪夢のようなものであつた。

#### 4. 涿源県付近のダム調査の思い出

華北電業公司の発案であつたが我社の電業部の企画であつたか記憶にないが涿源県付近のダムサイトの調査をやるので調査局から1人地質学に参加してもらいたいという電業部からの要請で私が行くことになつた。調査班のメンバーは電業部のN審査役華北電業公司の職員数名それに私の5~6名であつた。

北京からトラックで現場に向つたのであるが河は白河の1支流に属するものであるうか五台山に続く山脈に源を発して東流し内側長の城ある山脈を横断して華北の平地に流れ出す河であつた。

華北の河は一般に河幅の広い割に水量が少なく静かな流れであるかまたは河水はなく大雨の後だけの河で普通は奥地に至る道路として使用されているものが多いと考へていた私にはこの河の水量の豊富さ河中の岩や河岸の岩に白い飛沫をあげて流れるはげしさがまったく内地の川を見るようで楽しかつた。こんな川が大陸にあるとは夢にも想像しなかつたことである山脈を横断して流れるので川幅は狭く急流であるので地形的な点でもダムサイトとして申し分がない。地質は花崗岩類でこれまた上々のようであつた。

帰りは易県近くの某王様の墓地を見物してかえることになつた。墓地といつても昔の王侯の墓は豪華なもので今は廃墟となつてゐるがそのスケールはさすがに大きい数100mの直線の参道の両側に色々のけだもの石像が並び半ば枯朽した松柏が樹齡の古さをものがたり石彫の獣類は象に似て象に非ず馬に似て馬に非ずといつた具合に抽象化されたものだけに古い歴史と墓地という特殊環境とによつて妖しい美しさをかもしだしてゐた。さすがに淋しい感じはおおうべくもないが当時の王侯の栄華のあとが忍ばれた。

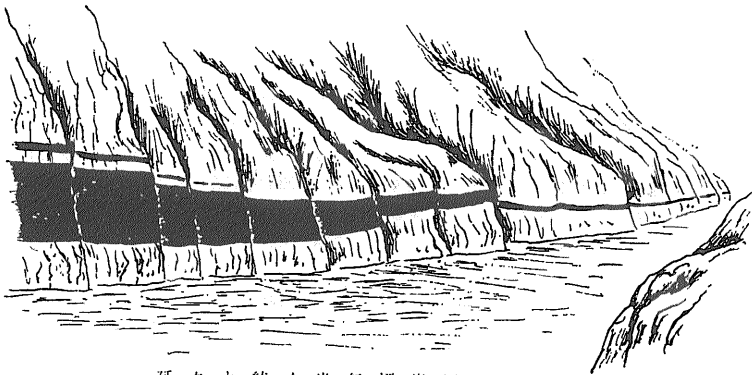
#### 5. 陽泉炭田調査の思い出

陽泉炭はストーブ用炭などの家庭用炭と

して北支の各都市で愛用されてゐるところでその与給源が陽泉炭鉱である。私は17年の秋？この陽泉炭鉱に続く奥地の調査を命ぜられて北京を出発した。陽泉駅に着いたのはすでに日は落ちてほの暗い電燈がホームをわびしく照している頃であつた。客のすくないホームを歩きながら私は今夜の旅館のことなど考へてこの山西の小盆地の町に独りで泊るであろう旅情にひたつた。改札口を出ようとする時脇から知らぬ人に声をかけられた“もし貴方は開発の清原さんでは”というのである。こんなところに知人はいない調査基地と炭鉱から数km離れた奥であるので炭鉱にも連絡してゐないので不審に思ひながら“そうですか”と答へると彼は“S重役さんからお迎えに参りましたどうぞ”といつて車に案内した。炭鉱には連絡してゐないS重役などという人も知らない。しかし先方は何等かの意味で私を迎えよこしたのに間違ひはない。私は車に乗込むと直ぐS重役なる人についてたずねた。運転手はよく知らない様子であつたが“なんでも此処にお出になる前は柳泉の鉱長さんだつたか”といふ。

それで話はわかつた。そのS君というのは接収員時代の同僚で私が内地から初めて大陸にわたり津浦線の大沈口炭鉱の接収員として行くとき濟南から現地までトラックで案内してくれたのが彼で途中橋梁かけ換え中の工兵部隊の軍曹に怒罵られたりS君のデタラメな切り抜けの口上で私が大学の教授にならねばならぬ破目におちいりとうとう部隊長が姿をあらわす始末となつた等彼は因縁浅からぬ仲であつた。其後半年余は大沈口の華豊炭鉱で同じ部屋に寝同じ軍隊の飯を食つてゐたが彼は柳泉炭鉱の接収に進発し其後その炭鉱の鉱長としておさまり私は北支那開発会社に調査局ができ北京に移り住んだのだお互の連絡も断たれてゐたわけである。案内されたのは小高いところにある小さな社宅であつた。S君は玄関を迎えてくれた互いに無沙汰を謝し座敷に上つた。玄関の土間に4打入のビール箱がなげ出されたままになつてゐるのが独身住いの気楽さを露呈しよその家とも思へぬ気安さがあつた。彼は相変わらず別居生活を続けてゐたのである。だから食うも飲むもまた寝るも接収員当時の再現であつた。さすがに4打入のビールは飲めるものではなく酔うにまかせて2人も打死してしまつたといふ結末であつた。

明けの日S君の指図で調査基地に自動車に向う。丘の上に造られた割石積みの一丁が今後1週間余の私の宿舎である。警備の兵員は軍曹を長として10名あまり



延々と続く半無煙炭層の露頭

私は心細い気持ちで敵襲の場面を想像した。アッツ島などと同様にこのような基地は最悪の場合は全滅の運命を負わされている。それは部隊と名のつく多人数のものから分哨という小人数のものに至るまで種々ではあっても敵味方が互いに戦略という術策を用いる戦争においては仕方のないことであり兵隊さん達は否応なしにその運命に従順ならざるを得ないものにされてたある人は悟りを開いた高僧の心境に近いものを持ったであろうが大部の者は非道に近いことも行なつた軍隊というものに対する怒りをどうすることもできずに泣き入りするようなあきらめて柔順だったのかも知れない。

このトーチカは直径10m余のドーム型で割石を積み上げて造られその周囲に深さ2~3mの壕を巡らし壕の外側には鉄条網を張った3重のものであったがさらに1km余り先の山手には万里の長城式の深く長い壕が数kmにわたり掘られていたその壕を夜な夜な敵が埋めに来るといのである夜隊長は兵隊数名を連れて襲撃してやると云い残して私と2~3名の兵隊を残して出かけて行った。その夜程心配でおちつかぬ数時間を過ぎたことはなかった。接收員当時1週間余にわたり昼も夜も撃ちまくられたり静楽の満備調査の帰路の敵襲などは直接敵と直面してただけに恐ろしさの点では比べものにならないがそれは不安というものを乗り越えた恐怖観念であって平静のなかにソクゾクと神経を刺激する不安というものもまたたまらないものである。夜明け前にやっと帰ってきた夜襲隊の姿を見て今までの緊張が一時にほぐれて酒に酔った時のように他愛なく眠ってしまった。

陽泉炭鉱から続くこの一帯の炭田は数カ所にごく小規模の狸掘り式の炭鉱があるに過ぎないが5m余の厚さのキラキラと光沢のある炭層の露頭が延々と数軒も続いている状況は目の覚める思いであった。そしてこんな未開の地みたいな所にも鉱区権というものがあるのだろうかなどと変な錯覚におちいるのであった。

ある狸掘り坑内に入る坑口に立って「入ろうか入るまいか」と思案をしていると驢馬を引いた百姓が入って行ったので私もその後が続いた。3度余の水平に近い緩やかな坑道を10数mも歩くと支柱が1本もない広い洞穴になった。カーバイドランプが1つ2つついておぼろに坑内の状況がわかる。それは30m四方もあり天井の高さが5mもあるので坑内などというものの感じではなく鬼の岩屋といった感じのものであった。突き当たりが切羽で30cm

から40cm角ぐらいの塊炭が石垣を積みかけている道路端のようにごろごろ転がってそのそばに粗末な机

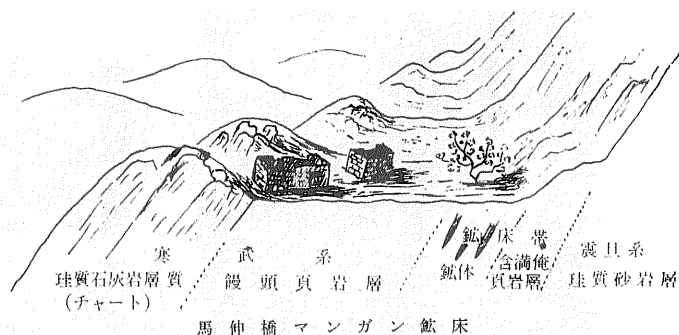
が1基おいてある。机の前に立った先き程の百姓と机の向う側に立った本坑の経営者であり営業主任である鉱主との間に商談が成立して百姓は何がしかの銭を払って1尺角余の塊炭を驢馬の背の両側に1個ずつ積みと「謝々」といって坑外に出て行った。私にはこの採炭と売炭の方法が面白いものに思われた。

これでは日本の鉱業者が見たら「よだれ」の流れそうな大露頭が延々と続いていても少しも不思議はない日本内地でも鹿児島県下のある金鉱山にこれとは完鉱其他に多少の違いはあるが似たような経営の鉱山があるとのことである。それは非常に優秀な金鉱を産する鉱山で年間何トンかの鉱石を出したら坑口に桓をして一切出鉱せず父祖伝来の宝を小出しにあたかも貯金を少しずつ引き出してつかうように鉱山の余命を引き伸ばしているものがあるとの話を聞いたがよく似たもののように思える。

この附近の炭田は山西省構造盆地の東縁の1点に過ぎず大同炭田が大きいなどと云ってもほとんど山西省全体が炭田であろうと見られているのに比すればそのスケールの違いも肯かれるのである。調査も終わりトーチカ生活に別れを告げる朝部落の治安維持会長という老人が2人の若者に1尺角余の白木の箱2個を持たしてトーチカに現われた。鶏卵の入った箱であった。1個は隊長に1個は私にくれるという。有難く頂戴して北京に戻った。

## 6. 薊県馬伸橋附近のマンガン鉱床調査の思い出

馬伸橋という町は北京の東方100km余の地点にあって満州国境のすぐ近くである。当地域の満備鉱床については先きに(16年?)通産省地質調査所(当時は軍需省地下資源調査所)のT技師が踏査され17年春北支開発調査局で調査を計画したのであるが略同時期に満州鉱業開発会社でも調査を希望し申請していたのであ



た。現地部隊としては著しく治安の悪い所であるので警備の都合もあり両社の調査は同時に実施してもらいたいとの要望があった。そこで我社では小生と測量のN君 鉱発からM氏と60歳才かの老測量家某氏がその調査に参加した。治安が著しく悪いので1地点に長時間止まって調査することは敵の集結襲撃の時間を与えることになるのでどんどん移動して貰いたいとの警備隊側の要望であった。それで調査は地質員も測量員も1塊りになって歩いたのであるが鉱床が帯状に長く続くので基点は好都合であった。このような調査だったので小生と同行した若い測量家N君にはまったく手の下しようもなく図面を作るなどのことはできなかった。鉱発の老測量家はさすがに老練の士で首から下げたプラ板というスケッチ板上に上手に図面を作っておられたがいたいたい程に苦勞して作られた図面を写させて下さいとも申し出かねて私共の今度の調査は未完に終わった。

その翌年 たしか18年の夏の頃であった。現地の治安も著しく良くなったとの情報で再度調査計画が立てられた。地質は先年度の関係で私が行くことになり助手のF君も同行することになった。測量は既に故人となられたS君と助手のN君運転手のI君と通訳のE君を合わせて6人の大世帯になった。

北京から通州までは直線に近い立派な舗装道路で快適であったが元氣者のI君は60kmを越す猛スピードを出して私共をはらはらさせた。しかし通州を過ぎると道も悪くなり治安の点でも心配であった。昨年通った時も心配であったが治安が良くなったという現在でも無警備で長い道中をするのは心細い。それに悪路のために自動車がよく走らない。故障でもおこしたらどうなることかと気をもんだことであった。そしてはるか彼方に馬伸橋の城門が見えてはじめてその落ちつかぬ気持ちがおさまった。(以下次号)

(筆者は福岡駐在員)